



2006年世界選手権団体準決勝。小手面で先制したヤングは、この相面で二本目も奪い、大将戦に望みをつないだ

関係は薄かった気がしますが(ヨーロッパは別かもしれませんが)。しかしその状況が少し変わったとは思いますが。アメリカチームを例にすれば、2008年には始めてヨーロッパ選手権の視察に行き、2009年には史上初となる日本とアメリカの合同合宿がロスで行なわれたり、韓国とアメリカの合同合宿が韓国で行なわれました。そこから勢いがつき、2014年にはヨーロッパ選手権前にハンガリーやイタリアと合同稽古をしたり、史上初と

Stars Align 世界の剣道の潮流を感じて

取材・文=安藤雄一郎 撮影=金野孝次郎

なる日本での強化合宿に参加、2015年には韓国の代表トレーニングセンターで韓国チームと合宿したりいろいろな機会ができ、国同士の交流がオープンになったのではないかと思いたいです。今年1月末には日本、カナダ、ブラジル、アメリカの4カ国の代表選手による合宿がアメリカで行なわれました。10年前にはこんな交流なんて想像もつかなかったですね。2006年の大会以来、ほかの国で頑張っている選手から「アメリカチームはHope(希望)を与えてくれた」と聞くことがあります。それはやはり嬉しいです

ね。ブラジルやカナダ、フランスなど、いろんな国の選手が僕のところに来て、「どうやったらかちは強いチームを作れるか。われわれもがんばりたい」と言われることがあります。ライバルの国であってもそういう気持ちはrespect(尊敬)しますし、応援したいです。今でも、定期的にいろいろな選手と情報交換や相談などに乗ることもあります。勝ったことに対して感慨にひたることはいっさいありませんが、そのことによって変化が起こったことには感謝しています。それから、アメリカチームというつながりやシステム、組織がつくれたことも大きいですね。私や弟のダニエルは筑波大学に1年間留学しましたし、アメリカ代表チームで警視庁や筑波大学で稽古をしたこともありましたが、「これくらいやらないと強くなれない。日本に学びに行かないと一流になれない」といった気持ちはいつでも持っていていかないとけないと思います。私たちが学業と剣道を両立するため、仕事と剣道を両立させるためにいろいろなものを犠牲にしてきました。今、私は次の選手たちを指導する側に立っています。うちのチームを見てると剣道に対する熱心さ、がんばりは充分感じられます。今のアメリカの選手は私たちと同じように努力して、剣道に対するrespect(尊敬)を持ちながら日々修行すれば、必ず良いチームが作れると思います。そし

て、今年9月に韓国で開催される世界大会では、勝ち負けに関係なく、後悔はないと思います。そういう剣道を愛する子がいれば剣道は必ず広まっていくと信じています。**「無理じゃない絶対できる」と** アメリカのスポーツ界における奇跡として今でも語り継がれているのが、1980年に開催された冬季オリンピックのアイスホッケー競技でソ連を破った試合です。実力では圧倒的な差があると思われた相手(ソ連)に対して、まさにmiracleを起こした試合でした。[Miracle on ice]という映画にもなっています。アイスホッケーのチームにも通じるのかもしれないですが、私たちが当時はずっと怖さを知らなかったというか、本当に「勝てる」と信じていました。今になってみればよくそんなことを考えられたと思います。あのときは夢への純粋な熱さ、が先行していました。「勝てるわけがない」というたくさんの先生方の声にも、「なんで無理なの? 無理じゃない。絶対できる」と心の中でこっそり思っていました。今となればいい思い出ですが、台湾に入る1カ月前、私たちは筑波大学へ行って学生たちと練習試合をしました。0-5でボロ負けしました。でも、アイスホッケーでもアメリカ代表は大会の1週間前にソ連と練習試合をして大敗しています。



昨年6月、テキサス州にできた北米トヨタ本社のロビーにて

アメリカ クリストファー・ヤング

1970年に第1回大会が実施され、2015年までに計16回開催されている世界剣道選手権大会。男子団体戦において日本は15回の優勝を果たしている。たった一度の敗北の相手は、韓国ではなく、アメリカである。選手、スタッフ全員が仕事を持ちながら剣道に打ち込み、環境ではおおいに日本を下回るなか、なぜ日本を倒す奇跡が起きたのか。そして、その偉業を果たした彼らは今、何を思っているのか。世界選手権に合計7度出場し、3大会でキャプテンを務めたクリストファー・ヤングに聞いた。

もうあの大会(2006年)は12年前のことになりますね。正直なことを言うと、2006年の世界大会のことは、誰かに言われなくても全然自分では思い出すことはないです。あえて思い出すと、日本に勝利したことよりも、あのときの仲間たちと、あの頃から歩んで来た道のことを思い出します。当時は気づいていなかったかもしれませんが今となっては本当にいろんな意味で「星が並んだ」(Stars aligned)のだと思います。すべてが「一期一会」といいますか、一生に一度くらいパーフェクトに並ぶ瞬間だったのかなと。

いちばんは、本当にすごいチームメイトがそろったことです。アメリカチームとしての結果なのに自分ばかりがいつもお話ししてしまっていますが、本当にこれはみんなの力を合わせて描いたものだと思います。もちろん剣道の技術もそうですが、それ以上に剣道に対する熱さ、チー

ムに対する愛、夢をおいける情熱……このチーム全員に同じ気持ちがありました。あとは根性です。よくみんなに「ライオンに顔と顔を合わせて戦える」ぐらいの根性があるのかと聞いてました。どこの国でもこれらがそろうことはなかなかないと思います。10年以上同じ仲間とチームを組み、一度も喧嘩もないうまくできたのはすばらしいことだと思います。

2006年の大会直後、「剣道界が変わった」と言われました。当時私は、「1つの大会の結果で何が変わる必要はない」と言いましたが、今でもその思いは同じです。ただし、その世界大会から、剣道の世界が少しだけclose(近く)になったと言いますか、共通する思いが増えた気がします。それまで、各国は3年に一度世界大会で対決し、最終日に日本と韓国の決勝を見学するというパターンでした。大会の間の3年は、他の代表チームの

